

# 令和6年度 フラグシップ推進研究活性化プロジェクト経費 成果報告書

系名	省察体系化ユニット
プロジェクト名	日本の教員養成系大学・学部における省察プログラムの多様性と共通性
プロジェクト概要	<p>欧米における省察を重視した教師教育の立場には、デューイの流れを汲むショーンの立場と、ハーバーマスの流れを汲むヴァン・マーンやザイヒナーの立場という二つの立場がある。</p> <p>前者の立場は、教師が驚きや戸惑いを感じる子どもの言動に対して、子どもの文脈に沿ってその言動の背後にある理を見出すことを通して、教師が自らのフレームを分析の対象とし新しいフレームを創出することを省察の内実とする。したがってこの立場は、早期から授業経験と省察を繰り返す教師教育プログラムを提唱してきた。しかしこの立場に立つ省察プログラムは、本来の意図に反して単に目的達成のための手段の効率化に陥ることもある。</p> <p>それに対して後者の立場は、授業が起こる社会的・歴史的・政治的文脈を考慮して個人の行為を分析するという視点を持つ立場であり、自分の置かれている文脈やすでに当然とされている実践に対する社会的な制約やイデオロギーに気づくことを省察の内実とする。したがってこの立場に立つと、授業の省察という省察プログラムを超えることが必要となる。そこで、授業が起こる社会的文脈やカリキュラムを批判的吟味の対象とすること、個人レベルではなく学校レベルの省察を支援すること、そして教師教育プログラムを教師自身に評価してもらうことなどが求められる。</p> <p>本学の省察プログラムはまだ構想段階であり今後いっそうの具体化が必要であるが、まずは、「エビデンスに基づく教育」や「データ駆動型教育」が既定路線となり本学もそこから自由ではない状況において、省察プログラムが目的達成のための手段の効率化に陥ることに抗するための知見が必要となる。</p> <p>また、本学の教員養成フラッグシップ大学構想が「ダイバーシティ」の実現を掲げていることを踏まえると、本学の省察プログラムが二つの立場にまたがるものになることは必至である。もとより、先行して他大学で実施されている省察プログラムについても、二つの立場にまたがるものが見られる。</p> <p>以上から浮き彫りになってくるように、本学の省察プログラムの今後を展望するためには、日本の教員養成系大学・学部における省察プログラムの多様な実態を把握して布置を描き、その中に本学の省察プログラムを位置づけていく必要がある。さらには、多様な省察プログラムの前提となっている問題関心の交点を探り、日本の教員養成系大学・学部における省察プログラムに共通コアと言える内容の創造に向けて動き出す必要がある。</p> <p>このような問題意識と目的に照らして、本プロジェクトでは、まず省察概念を、目標達成の手段の有効性を検証する「技術的省察 (technical reflection)」、実践の前提となっている目標まで検証の対象とする「実践的省察 (practical reflection)」、そして教師が自分の置かれている文脈、社会的・制度的・政策的な制約、当然とみなされてきたイデオロギーに気づく「批判的省察 (critical reflection)」三層に整理できることを確認した。</p> <p>また、教師の学習を「専門職的学習 (professional learning)」と「専門職的アイデンティティの学習 (professional identity learning)」の両面から捉え、その交点に三層の省察が位置付くことを整理した。</p> <p>以上の理論的な整理を踏まえて、本学の学部教職課程において、「専門職的学習」と「専門職的アイデンティティの学習」がどう位置付くのかを検討した。そして、「専門職的アイデンティティの学習」については十分に保障できていないことを確認し、「専門職的アイデンティティの学習」を保障するための系統的なワークについて構想を練った。</p>
プロジェクト構成員 (リーダーに※)	桐村豪文、佐藤雄一郎、※八田幸恵、森兼隆、森本和寿、吉田茂孝、王林鋒

※様式は頁数が増えても差し支えありません。